自選世話物集

附 私の世話物の出来るまで

宇野信夫著・青蛙房版

自選世話物集

附　私の世話物の出来るまで

宇野信夫著

書名　自選世話物集
著者　宇野信夫
発行者　岡本経一
印刷　㈱新樹社印刷所
用紙　㈱金文堂洋紙店
製本　㈱若林製本所
発行　昭和四七年十月一日
定価　一、八〇〇円

東京都文京区本郷二ノ一七ノ九
発行所　有限会社　青蛙房
電話東京(八一三)一五九七
振替東京七二三八四

0093—00207—3800

私の世話物の出来るまで

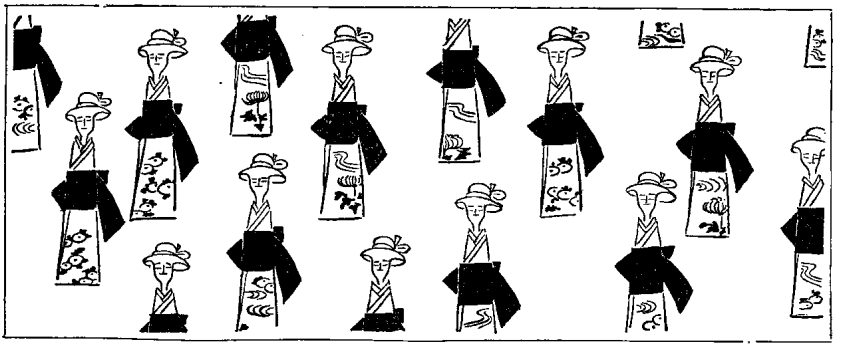
春の泡雪　三幕五場　六九

恋慕の鐘　三幕　一〇三

しぐれ人形　三幕六場　一二九
不知火検校　沖津波闇不知火（おきつなみやみのしらぬひ）　六幕十四場　一五五
恋渡橋場乃沫雪（こひわたるはしばのあはゆき）　五幕十六場　二一一
露時雨　三幕九場　二五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

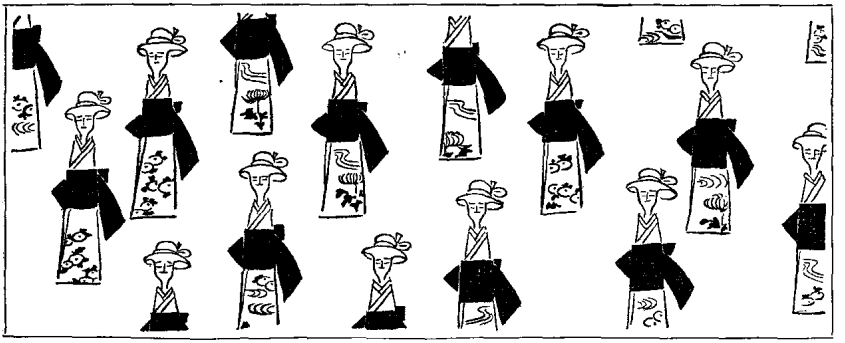
私の世話物の出来るまで



□

私の書くようなものが、果して世話物ということが出来るかどうか。それはとも角も、江戸の風物、路地木戸の中の出来事、行燈と時の鐘の世界を、私は好んで書きました。いや、現に今も書きつつあります。

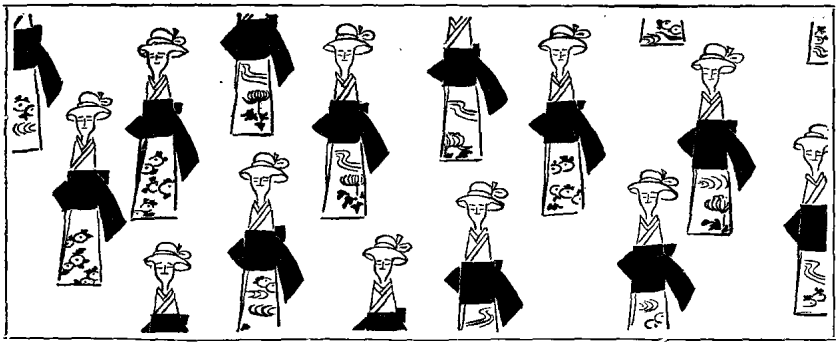
六代目菊五郎が「巷談宵宮雨」という拙作を上演したのが昭和十年、それ以来、私はおもに六代目の為に、世話物を書きました。六代目菊五郎の為の世話物を書くことで、私の若い日は過されてしまったといってもいい位であります。これを私は決して悔みません。昭和二十四年に、六代目は歿しましたが、その後も鈍才に鞭打って、私は世話物を書き続けて居ります。此の集には、それらのうちの五篇を選び、戦前、昭和十三年、六代目の為に書いた「露時雨」



を添えました。これを上演した頃、六代目も五十になったばかりの、いわば役者ざかりでした。今、此の「露時雨」を六代目で見ることは勿論出来ません。そういえば他の五篇のうち、「恋慕の鐘」の浄雲を勤めた海老蔵（十一代目団十郎）「春の泡雪」の佐平の猿之助（猿翁）おりつの左団次、い組の千蔵の中車、四人とも、あの世の人です。いかなる優れた「芸」も、その人の死と同時に、永久に消え去り、人々の記憶に残るのみです。しかし、それらのすぐれた歌舞伎役者の演じた戯曲は、こうして残って居ります。私はせめてそれを慰めとしなければなりません。

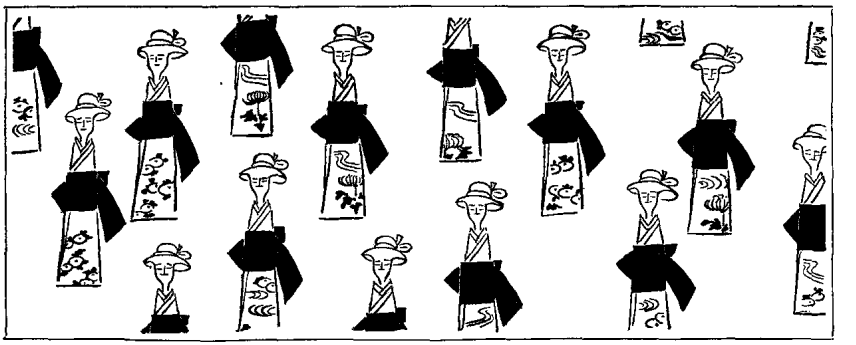
□

私が「巷談宵宮雨」を書いたのは、三十になったばかりの頃で、その頃橋場に住んでいました。名古屋の人の建てた家を、父が買い



とったもので、運よく震災にも焼け残りました。当時、浅草は観音様を除いて全焼したことになっていましたが、白鬚橋のたもとの一劃だけは、焼け残ったのです。私の家はその中の一軒でした。

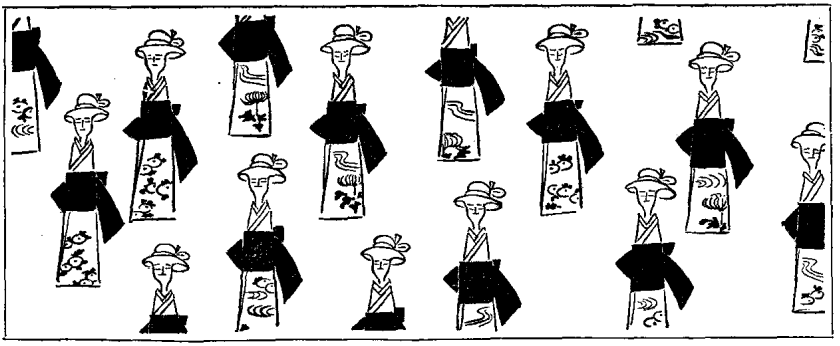
薄暗い、鰻の寝床のような住居で、女中一人を使い、机のそばには何時も猫をはべらして暮していたのも、親の情(なさけ)です。学校を出て、四、五年たった時でしょうか。その一月に、東京劇場で、短い「吹雪峠」という一幕物が、先代左団次によって上演され、少しは将来に明るみを見出したような気がした頃でしたけれども、生活にも、まるで自信はなく、若者らしくない暗い日々を送っていました。隣りには日蓮宗の行者が住んでいて、朝晩、どんつくどんつく大太鼓を叩いていました。狭い庭はじめじめとして、花の咲く木は殆ど育たず、八ツ手がいたづらに大きな葉をひろげ、柘榴が、午後の一トときだけあたる日ざしの中に、とぼしい花をつけていました。日が昏れて、満潮時になると、どこからともなく、音もなく水



が出てきて、庭は水びたしになり、おびただしい蚊柱が、そこら中に立ちました。風のむきによって、隅田川をゆくポンポン蒸汽の音が、手にとるように聞えることもありました。

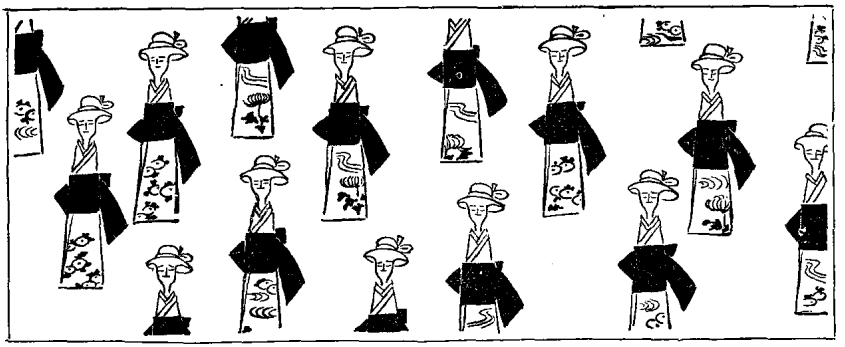
私は学生時代から、歌舞伎や新劇よりも、寧ろ講釈や噺を好みました。劇場の椅子は冷くそっけなく、講釈場や寄席の方が、親しみやすかったのです。その頃はまだなんといっても世の中がおだやかでした。夏休みには、朝食をすますと、まるで学校へでも通うように、今戸から山の宿、二天門から六区へ出て、金車亭の昼席へ通ったものです。金車亭の横手は庭になっていて、そこから着流し、カンカン帽子の講釈師が、風呂敷包を抱え、カタカタと日和下駄の音をさせて、楽屋へ入って行く姿が見えました。軒には虫籠がつるしてあり、キリギリスの鳴く声が聞えました。講釈師は着流しで釈台へ向うと、おもむろに風呂敷から本と張扇をとり出し、じろりと客席を見渡してから、ピシリと張扇を打ち、はじめは小声で何かボソ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



ボソと話し、そのうちに本当の声を出す。私は柱によりかかって聴いていると、時間がうつるにつれて、陽が客席へさしこんでくるので、坐蒲団をもって方々へ居どころをかえました。そこ此処に木枕でうたた寝をしながら聞いている人もあります。（講釈場には木枕が用意してあって、横になりたい人には貸してくれました）中には、スヤスヤとねむっている人もあります。うしろの羽目板に背をもたせ、何時も座蒲団を重ねて、牢名主のようにあぐらをかいている老人をよく見受けましたが、これは「砂屋の旦那」といって、浅草寺の砂の権利をもっている人で、その砂を袋に入れて、参詣の田舎客に売る、その金が入るので、祝儀をはずむところから、大事な客だったことを、あとで聞きました。

その頃は伯山が人気の絶頂で、独演会で清水の次郎長を読むと大入満員になりましたが、私は、典山の、しっとりとした世話講談、ことに天保六花撰、小夜衣草紙や村井長庵が好きでした。



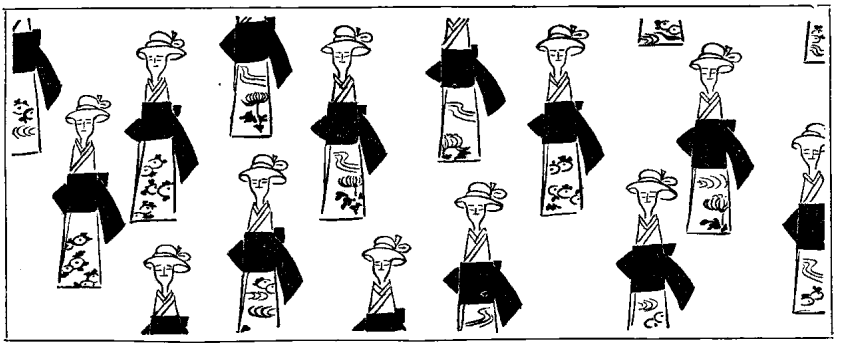
□

「巷談宵宮雨」を書く三、四年前、まだ私が三田の学校へ通っていた頃、文壇では新感覚派と称する作家が頭をもたげ、一方では左翼の演劇や小説がさかんでした。主義主張、イデオロギーをもたないような作品は、無意味無価値であるというのが一般の風潮でした。

新感覚派横光利一氏の「春は馬車に乗って」が評判になるかと思えば、左翼の作家が続々と世に出ました。

二つの新劇団は、帝劇と本郷座で「西部戦線異状なし」を競演しました。「太陽のない町」とか、「何が彼女をそうさせたか」も評判でした。

私は新感覚派の小説も読み、左翼の戯曲やイデオロギーをもっているという小説も読んでみましたが、一向に頭に入るものがありま

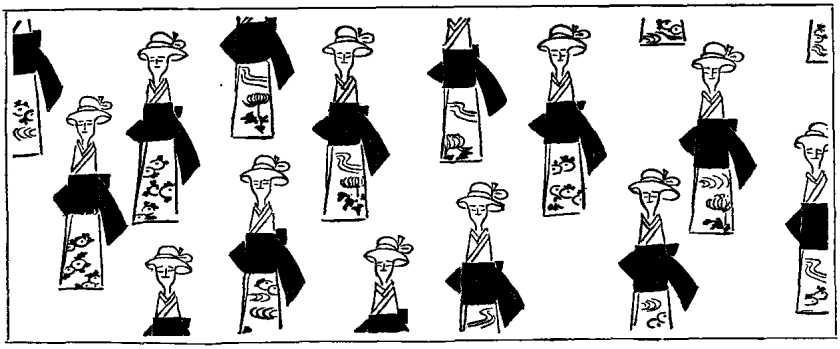


せんでした。私に面白いのは、やっぱり講釈場や寄席、円朝の速記本や、京伝種彦や、南北黙阿弥でした。

私は寧ろ意地になって、江戸末期の人情本や読本(よみほん)を読み耽りました。小説といえば、紅葉露伴、荷風鷗外のほかは、ほとんど興味がありませんでした。

「今どき紅葉や露伴鷗外が好きで、おまけに南北如き作者に傾倒していたのでは、文筆で世に立つことは覚束ない」と、ある友人は、親切にさとしてくれました。私はそれも一理ありと思い、学校を出たあとは勤人になろうとして、一生懸命勤口を探しましたが、未曾有の不況時代で、文科出の者に勤口は見つかりませんでした。やむをえず、勤人になることはあきらめて、新潟の姉の家で一ト夏をすごし、初秋の頃、浅草の橋場の家へ戻ってきました。

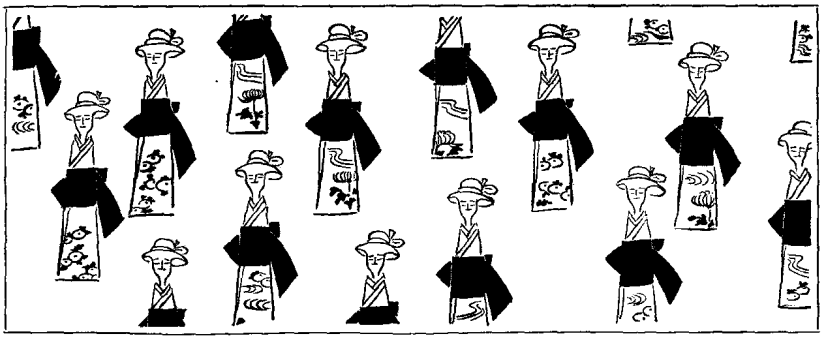
ある晩、それは月のあかるい晩でした。一枚だけ明けた雨戸から、雨気をふくんだ風が流れこんできました。私は蚊帳の中へ机を



もちこんで本を読んでいました。そとは昼間のように明るく、蟀(こおろぎ)が降るように鳴いていました。机の上の本はビルドラックの「商船テナシテイ」でした。私は読みおわって、深い溜息をつきました。私はそれ迄、こんなに胸をうたれた戯曲に出会ったことはなかったのです。さして長くもない三幕の戯曲の中に、私は人の世のはかなさと、人の心の暖かさを、しみじみと感じました。

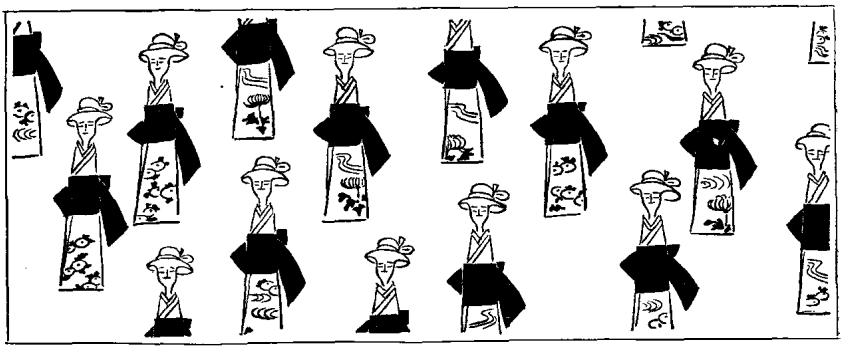
勤人になることの出来ない自分は、これから戯曲を書いて世に出る決心をしている、自作が、例え一作も世に出ないようなことがあっても、自分は決して世を呪ったり、人を恨んだりしてはいけない、こんないい戯曲に感激する心情を授けられていることを、神に感謝しなければいけない――私は心からそう考えました。その晩の素直な感激は、いまだに忘れることが出来ません。

□



その頃は、俳優にはめて本を書くことを、極度にきらいました。劇作家として、恥とまでいわれたものです。つまり、俳優本位であってはいけない、演劇は、あく迄脚本本位でなければいけないということからきているので、これは正論であります。

私の処女上演の「吹雪峠」も、左団次や松蔦猿之助にはめて書いたわけではありませんが、偶然に、その戯曲の掲載されている同人雑誌を興行側の人が読んで、左団次猿之助松蔦（いづれも先代）に格好な戯曲であるとして、上演するはこびになったのです。その後、前述の通り、六代目の世話物を書くようになりましたが、私が若いのにかかわらず、六代目の為の世話物を書くことを不思議に思った人もあったらしいのです。私は決して、六代目にはめて、六代目のからだや芸風を見て書いたことは、一度としてありません。私の書くものが、偶然に六代目に当てはまっただけのことです。とこ



ろがその頃は、六代目だけの名優の本を、若い駈け出しの作家が書けるわけのものではない、あれは六代目の考えたものだろう、とか、六代目の演技によってみせているものだとか、ひどいのになると、六代目と親戚ではないのか、とか、いろいろイヤなことをいわれたものです。それほどに、すでにその頃六代目は名優として扱われていたわけです。若い私は、時として、つくづく六代目の本を書くことにイヤ気がさし、なんとかして新しい方向へむかわなければならないと思ったものですが、そう決心して、新しく書き出したものは、やっぱり六代目でなければ出来ないような、六代目によって、はじめて効果のあがるようなものでした。そういうわけで、私は決して、はじめから六代目にはめて書いたおぼえはありません。それに第一、そんな器用なことは出来ませんし、そんな融通のきく頭脳はもちあわしていないのです。

ところが、最近の風潮は、役者にはめて書くことをよしとする傾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com